



明 遠
1449
卷 2

競奇遺聞

卷の二

禁戒戒邪淫僧尼

嵯峨天皇沙左位のころ免生く小犯戒邪淫の僧尼

あつそ不法の事ども叡聞小達しくはれ弘仁三年

乃及有司ヲ詔あつて項日俗輩れ男女事ヲ議聽

小託け摺りに僧尼の寺像小入り説法説くはち

屢侵犯の事多し外ハ勝因小似く内ハ却て淨業

を汚るを自今以後男子尼寺小入女人僧房中

入致し次と堅削きられ然る小き法都下の阿多



寺より遙奔^{いんけん} 劫掠^{きやくりやく} の僧^{そう} ありし事を遍^{らまひ} 語り傳^{つた} へたる
 その始末^{しまつち} を聞^き 小越^{こえ} 前^{まへ} の山原十郎^{やまはらじゅうらふ} とりて其^{その} あり
 先^{まづ} 祖^そ たり素姓^{すせい} 正^{ただ} しく小知^{こち} とも領^{りやう} ぎし老^{らう} ありしが
 世^よ 々^々 妻^{つま} へ源十郎^{げんじゅうらふ} 父母^{ふぼ} あり早く離^{わか} れ家内^{けいだい} は身^み 子^こ
 貧^{ひん} 困^{こん} 小^こ ありし火^ひ のつれいまま子^こ を持^も たられは其^{その} 事^{こと} を
 幸^{さい} 小^こ 高^{たか} 師^し 小^こ 入^い 書^{しよ} を讀^よ 誦^{じゆ} を學^{まな} び何方^{いづつうへ} ても志^よ ざらざらと
 只^{ただ} 志^し 人^{にん} 道^{だう} 江^{かう} 小^こ さしかを湖^こ 水^{すい} の風^{ふう} 京^{きやう} 小^こ さるを慰^{なぐさ} め免^{めん}
 海^{うみ} 邊^{へん} たり傍^{そば} て道^{みち} を行^ゆ 志^し 如^{ごと} 婦^む 小^こ 御^ご しく道^{みち} へ向^{むか} へ日^ひ
 已^ま 小^こ 美^み 日^{にち} 小^こ 及^{およ} び佳^よ 美^み の人^{ひと} も掃^は ぶるりたるから而^{しか} 小^こ

山^{やま} 小^こ せの林^{りん} の中^{なか} へり盜^{とう} 賊^{ぞく} 四^し 五人^{ごにん} 出^で 来^き て何^{なん} の金^{かね} 取^と りて
 前^{まへ} 後^ご たり源十郎^{げんじゅうらふ} を捕^{とら} へ理^り 小^こ 衣^い 袴^{かぶ} を剥^む ぎ脱^{だつ} 中^{ちゆう} 小^こ
 財^{たさい} 一^{いつ} 金^{かね} を強^{かう} 奪^{だつ} 小^こ 丸^{まる} 裸^{はだか} あり散^{さん} へり
 步^{あゆ} 擲^{ちやく} してさうらうらう逃^{にげ} りたる源十郎^{げんじゅうらふ} 幸^{さい} 今^{いま} 下^{くだ} を
 御^ご りたるも推^{おし} 乃^な 一^{いつ} 金^{かね} 銀^{ぎん} をも奪^{とら} へり其^{その} 時^{とき} 小^こ 纏^{まと} へり
 服^{ふく} も好^{この} くいんも詮^{せん} 方^{かた} 好^{この} く擯^{ひん} 鼻^び 禪^{ぜん} のと小^こ 甚^{じん} 馬^ば を巻^ま いて
 志^し 美^み のゆきて歩^{あゆ} りたりる民^{たみ} あり立^た 入^い 盜^{とう} 賊^{ぞく} たり
 逢^あ へし其^{その} 事^{こと} を語^{かた} り何^{なん} の事^{こと} 一^{いつ} 事^{こと} を聞^き せて語^{かた} りれしと
 涙^{なみだ} を流^{なが} してやりたる主^{しゆ} の翁^{おきな} 亦^{また} 算^{さん} じて其^{その} 偽^{いつはり} たる

風流なりち中^{いろ}磨^られれ一人^{ひと}と暮^くらぶと幸^{さい}あるべし
 ちづ愚^ぐ傍^{ぼう}が房^{ぼう}ふりてとて伴^{とも}ひりてそれらち中^{ちゆう}と
 めぐりて用^{もち}を毎^{まい}一^{いち}大小^{たう}便^{べん}をばりて寺^{てら}傍^{ぼう}と遊^{あそ}ぶに
 随^まひ其^{その}標^{ひょう}紋^{もん}凡^{ぼん}俗^{ぼく}を極^{ごく}いよしく憐^{あは}れを加^かへりて源^{げん}十^{じゅう}席^{せき}
 已^まふ心^{こころ}落^おち着^ちかひのくちを幸^{さい}と詰^つりければと方^{かた}勸^{くわん}学^{がく}
 乃^な志^しありて洛^{らく}陽^{やう}の鴻^{こう}儒^{にゅう}高^{こう}寺^{てら}小^{せう}束^{すく}ふ人多^{おほ}くはれ
 能^たく学^{がく}べと熟^{じやく}思^しふ取^と持^ぢたる源^{げん}十^{じゅう}席^{せき}と法^{ほふ}傍^{ぼう}り
 師^しのあてては人^{ひと}まふあり幸^{さい}一^{いち}已^まふ二年^{にねん}修^{しゆ}学^{がく}業^{ぎやう}
 稍^やと進^{しん}一^{いち}洛^{らく}中^{ちゆう}の貴^き族^{ぞく}も學^{がく}友^{ゆう}をく形^{かたち}て出^{いで}世^せの

ちづりて生^{せい}身^みあをばりて日^ひ清^{せい}去^{しよ}の房^{ぼう}と出^{いで}て鳥^{とり}空^{くう}と
 して僧^{そう}の院^{いん}ふむりては鳥^{とり}空^{くう}と出^{いで}て鳥^{とり}空^{くう}と
 ありて居^い眠^{めん}居^いたりて源^{げん}十^{じゅう}良^{りやう}院^{いん}内^{ない}を遊^{あそ}ぶ御^ごきりて
 紫^{むら}小^{せう}双^{じゆう}六^{りく}の吉^{きち}算^{さん}人^{にん}はれを遊^{あそ}ぶ客^{きゃく}なりて法^{ほふ}院^{いん}一^{いち}喜^きとて
 ありては園^{えん}を不^ふ樓^{ろう}掃^{そう}りり何^{なに}れ思^しふ事^{こと}も直^{ちやく}ふ
 樓^{ろう}ふを不^ふ樓^{ろう}上^{じやう}り二人^{ふに}の美^み女^{によ}お對^{たい}して双^{じゆう}六^{りく}を
 一^{いち}紅^{こう}顔^{げん}羽^う半^{はん}代^{だい}美^み乃^の美^み色^{しき}なりて源^{げん}十^{じゅう}席^{せき}を
 遊^{あそ}ぶ怪^{かい}怪^{かい}と氣^きをこめてけ樓^{ろう}ハ外^{がい}人^{にん}の来^きれりて
 誰^{たれ}人^{にん}ありてはとやと幸^{さい}とけち中^{ちゆう}に幸^{さい}とて一^{いち}喜^きとて



松平戲寫



せりまのぬり今日鳥室地りふりて双六のまゝほりて
 圖もしらに本好も唐突乃深紙赦一好てりとは
 婦人聲を低く君ハ羊さけ前の様子を知玉りぬ物
 ろぶしらハ寺僧密遊乃構少く若詰りても
 いらた事もな他人われはまらば教害せりて人の
 知りまらうらにまよく立仰り流しとや以源千良軍
 ちあしと必ぬぬ世之業乃まい少く不審ちをなすれ
 まげかたぐいハいぬる人あし流り流りて一人の婦人
 毒と江州志知里後橋某が女松枝りてこれぬり

知りて京あしを松竹の家おはしと包小十ちぬりぬはま
 中野れ淫傳ふ欺りて本業好くあふり又是るハ京地
 少し指を高く人好妻多と或は好業を用い癖業と
 何とて是好くあふ押入るる再び戶外ふさ
 本を許りてはさし以て一人の胃子怪つてり
 来りて僧徒何れ妙法と好く刺殺し後山
 埋ぬ君をもあえりかハる毒れ死りて一早疾き
 一と源十席横身を赤法と魚腹から縁を何と
 毒煙をせりて付逢平一少く盗賊ふを死し及ひて

此又後清氏乃情少く幸記命を賜りぬと云く次
 二葉書 蓮屋者三
 構小登りて源十良をさぐる事ぬ体少を亦知ひ
 半もあさといふにさくはあを知らひく事をもや源十良
 仍る言ふ事さすれ今日師を訪ひに室屋居たり
 妙く慈所に遠く双六乃吾を算く定て来客
 後院よりあか目録の来り偶然とて仙臺に
 多しぬ音さうりて師兄弟は風流の事我平生隔
 明き事あふんもさすとも源十良に於て戯れりや

此れバ為堂にさくをさく樓を下り従来の路れ
 門戸を渡り一覺轉つて了友傍を呼事とあ人しそ
 源十良が左右れを捕く引立一乃板室の門(連り
 々る備ふ林樹乃如し一細索一觸刺力一柄砒霜
 一貼を與つて曰汝は中何れも公小僧さく
 用ひ死を速べし然るに我二人れをを下し只今
 縊殺せぬといは源十良大小驚きさすれは是同事
 乃者介人の如く密事し小終く何乃好う何んも自然の
 科ハ免させぬしやる為堂と云我信家小密事預

二葉書 蓮屋者三

有り唯剃髮の者ハハ我軍密抄を知らずとも
 水を誅し有髪乃者小初ハ親父兄弟朋友らをも
 文小蘇の軍一能ハ後何ぞ況ヤ汝をヤ源十郎云
 ち何ハ我と又願ハ剃髮して僧とらるべし覺釋
 曰汝年来勤学切磋しそ舉業の事何り今一時
 乃難を逃まんハ剃髮せんハ實の心ハあハ
 今日汝を害せんとハ汝の目必我軍を害とべし
 碎之儀素グ古をとりて脱ん軍を休も文小救さ
 所なりと已小救さんハ源十郎今ハ早陳さん

辞さく涙と推く云茲年来清去師兄乃厚意を
 蒙り願ハ一面を得事を許さば拜謝して死ハ
 就ハ一為空ハ白汝清去ハ憑く命を助ん事を
 思つても清直つと又救ふ事能なる道なり然れども
 日ハの好ハ小憎く色をばらんとハ清直を呼ば
 まり源十郎清去ハ向て我師ハ恩顧の中
 中さく手りを送る一旦ハ私事をなされんハ何ぞ
 他ハ漏さくんヤ思つても今死せり及べり師父の
 意んをとりて厄難を極ハ玉ツれと身を抛く

口説ける清きも流石交情の海より新し哀を催し
 對する初も形あり一不為空の白一人の命ハ小形り
 寺内乃法を重し一ありけ隠不入老ハ忽ち
 骨肉を截断の何れ私乃因ふるのそ大依の寺法
 を破り清真何ぞ敢て汝を救んやと已不短力を
 胸小押あを清きまげとせとめと噫原十席
 汝が命極りぬ煩惱怨悔とくくひれ汝が屍をば
 冥へ埋葬しと法華を宮に冥福を祈らん
 然る来世ハ必富貴を享く生るべし寺法金法

とりと堅し油かけ地小陥る事偏小前世の宿業之
 されも交情の結縁を暫時乃死をゆるぎと三僧に
 説く前乃索刀某乃之刃を與へ板室乃門戸を蔽く
 鎖し今日死せんハ来日死まべしよも五日とばさるべ
 しと清きも三僧共出まりぬ原十席思ひも横難小きく禁
 籠ちも憤怒胸を焦し腸を腐ぬ免ても助さずとて
 命を乞ふと苦を受んたり毒茶を天口く死せんや縊死
 ややむ自殺やせんと千思万慮又に出るころ形
 然るに後清り女松枝又もさるる好ゆとく甚たれを

儂といふも一そ命を助かりくどひらの幽園の中より
脱出するを術を細小書きて免小前を捕へて首小
らるに竹纏ゆる板の透るるに室の内へ放り入り
源十郎ゆれを怪し投ぎんらに松枝が西ありはハ津の
軍に控ゆるぬと大小を並び索を深乃より投りけり
縋ゆるを柱を抱き天井乃板をカ小任せ推しぬ稍
ゆるぎありりし体なら放り天井の上小入るりかこり
遠りり記るるに松枝の書中に知せし如く笠筒間
がしりゆのちゆるありりしハ短刀をちりて土瓦毀ち

名を抜く疑なく這出ぬまされ洛陽中より平生
乃學友小右乃始終を結せりし國者も歯を切り
憤を起しびしりしゆり何れも源十郎小ちるを添
評議を極免辨仕をきく免早速小海くりりかくる
寺中ハ四五日をこりりしれハ之僧舎命して定くる
今も子死ありりし且ハ義も又ハ並び之人お伴ひ遣て
戸を閉きししれをうに新をかりし信大お肝を
潰し勃然として名証をいけ室四壁鉄桶のありし
いうゆる術ありて抜出たりとてゆりり早して脱去

乃穴りり之人お強しと云是實に一大事なりと云
 自來六浴湯乃宿あり妙已多し一室を迷に宿廳
 小解し一特小者くけ寺中不左車一法人の初ふ之
 亦堂中と浄苑ありけ奸惡の事いかに浄をさし
 陳謝もも印石敵とてい今中宿命らば遊るべし
 道々しつをバ一先外車小託てきまて一外僧小昔て
 女あちをさるく何ぞくゆも惡びる一板室をとも
 致べし一勢くハ廻國修り乃々先行脚せしと
 披落しと西ものもえらふずうら事人駭ひく寺に

出奔以諸官司中を源十郎が新炭重乃奉おれ
 急見下吏救十人を百連寺内に入り一巡一小穿鑿
 究問とらん非法無礼乃奉おれし一諸僧破戒乃責
 更小脱まがごし一の二女を召ふ文にとど一僧を結
 とうて拷問しこれハ息を止ぬるそ終小後山岩窟
 乃ららり搜し出しあはれらるるに寺僧平生乃
 惡事をもおし白状を官司大小怒らしし一上へ
 寺しこれハ腰斬車裂をとも飽足ざる邪謀之罪
 をとらし後來の懲えらるるべしとて法方小人を

配りてか乃三僧を捕べしこまびく觸流し不見に
 寺僧を赤裸しと白書し遊舞し諸三僧
 乃諸射を悉く源十郎にしまと集ひしり
 女子共いづしと親敵り送り戻されたる源十郎
 漁翁乃父子に討らんと命せられ也を体
 松枝を妻にや清其正存しあがるまくの貨とめく
 松枝をばい本小塚まらるがまづ志和の里小乙教
 友時翁が家小入ける乃尾を語りりれ公孫乃
 夫婦大小驚きとた乃涙に咽び出れ偏に宿縁れ

今とありぬり松枝が事と最早死しぬし思ひ小
 再び急事一の娘きつと替れれ式を取営し一家に
 悦びかぎりぬ源十郎響く翁の方小逗留しぬ
 小劫くは其跡堅田乃浦を船中過るに罪逃れぬ
 かれ之僧船の巾にたれを源十郎天れ與へし
 悦ひ船端しけりまらりて大不呼りて言せ怒り
 りねバ三人ハ朝もぬ船座小隠れて出合を頓て船
 水主小出の者乃しや源十郎捕てる所乃
 官吏一渡し各各以尋何を惡僧共乃事ぬれ

清直と京師小引海を其村源十郎清直と
果初く呼ぶを沙と二僧一不小窓へ渡るとれども
これ已前殺害す遇ては汝誓す乃命を續し
恩を私乃心を以て見通せり早くんが世も
逃渡るべしとて逃殺らるる我れより源十郎ハ
本酒越前不承とて家漏秘之業小暮しりると

競舟の遺聞 卷北二終

